井の頭自然文化園開園 70 周年記念
「わたしと井の頭自然文化園」エッセイ

思い出賞：板倉捷重

はな子さん

「これがママなのよ」と二児の母となっている娘が探してきた写真を指して言う。

私たちと孫と井の頭自然文化園に行った数日前の写真を届け、皆でみていたときのことである。私の届けた写真も娘の写真も豆新幹線に得意顔で乗って手をあげている。姉妹かと錯覚するくらい似ている。

娘の写真は昭和五十年頃だったと思う。当時私は京王井の頭線で通勤していたので、休日には、家族でよく恩賜井の頭公園の池の端を通って井の頭自然文化園に行った。

娘が最も好んだのは、象の「はな子」さんであった。「はな子」さんは、一九四七年生まれというから二十代後半、動作がなめらかで係のお兄さんから貰ったリンゴを鼻で素早く口に運んだ。娘の「凄い、凄い」と柵にしがみついていた姿が目に浮かぶ。なかなか離れようとしないので「コーヒーカップ、新幹線にいこうかな」と気をひいたものだった。

その後、娘が小学生になり、私の勤務地が多摩地区になったこともあって、井の頭自然文化園から遠のいた。今年の三月、久しぶりに泊まりにきた孫に「何処か行きたいところあるかな」と聞くと、「象をみたい」という。

「象か、はな子さんに会いにいこう」と自然文化園に誘った。

数十年ぶりに、公園の池に沿って歩き、自然文化園についた。私たちはシニア料金、孫は無料であった。

入場すると、真先に象舎を目指した。

「じいじ、はな子さん、いるよ」と孫。

「いた、いた、元気そうだ」と私。

はな子さんは六十五歳位の筈である。我が国の象の最年長と聞いている。往時のはな子さんより小さくなって、肌もかさかさしているものの子供たちに鼻を振ってあちこち歩いてみせていた。孫も「はな子さーん」と、夢中であった。

昼ご飯は園内の売店で求めた「はな子弁当」。

「このお弁当食べると大きくなるね」と言いながら食べた。

乗り物も当時のままで、子どもたちが並んでいた。孫は、豆新幹線に並んで順番を待った。

孫の脳裏には、井の頭自然文化園が深く刻まれたと思った。そして私たち夫婦にとって井の頭自然文化園は「オアシスだ」と感じた。